令和７年度
「地方やデジタル分野における専修学校理系転換等推進事業」
　先端ＩＴ人材育成学科新設プログラム開発事業

事業成果報告書

令和８年３月

学校法人穴吹学園

穴吹ビジネス専門学校

本報告書は、文部科学省の教育政策推進事業委託費による委託事業として、学校法人穴吹学園 穴吹ビジネス専門学校が実施した令和７年度「地方やデジタル分野における専修学校理系転換等推進事業」の成果をとりまとめたものです。

目　次

第１章　本事業の概要

１．本事業の概要と目的等　2
２．実施計画の全体像　10

第２章　令和７年度の活動

１．令和７年度の活動
（1）令和７年度の全体スケジュール　12
（2）令和７年度の取組内容　13
（3）事業実施に伴うアウトプット（成果物）　25
（4）事業実施によって達成する成果及び測定指標　26
（5）本事業終了後に実施予定の取組及び成果の活用方針・手法　27

資料

１．「生成 AI／クラウドサービス活用」実施結果　29
２．「Microsoft365／PowerApps、PowerAutomate」実施結果　47
３．「IT ツール活用講座」（社会人対象）実施結果　65
４．実証講座シラバス・コマシラバス、使用教材　82

議事録

１．第１回プログラム検討委員会　84
２．第２回プログラム検討委員会　89
３．検証評価委員会　94

第1章　本事業の概要

1. 本事業の概要と目的等について

（1）委託事業の内容

転換・新設（地方やデジタル分野における専修学校理系転換等推進事業）

（2） 事業名

先端 IT 人材育成学科新設プログラム開発事業

（3） 構成機関（プログラム検討委員会）

◆教育機関

	名称
1	学校法人 麻生塾 麻生情報ビジネス専門学校
2	学校法人 有坂中央学園 専門学校 中央情報大学校
3	学校法人 龍澤学館 MCL 盛岡情報ビジネス＆デザイン専門学校
4	福山職業能力開発短期大学校
5	学校法人 穴吹学園 穴吹ビジネス専門学校
6	学校法人 穴吹学園 穴吹カレッジキャリアアップスクール福山

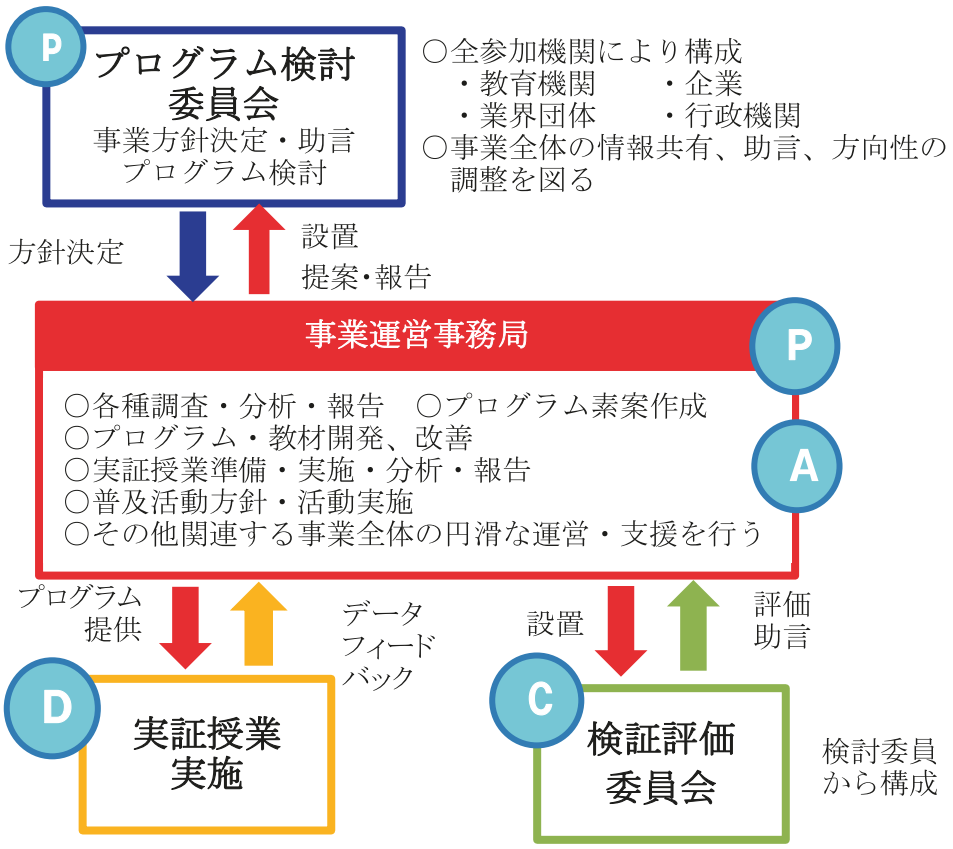
◆企業・団体

	名称
1	株式会社もみじ銀行
2	株式会社ミウラ
3	アドバンスシステム株式会社
4	株式会社アクトシステムズ
5	株式会社グローバル専門人材開発ラボ
6	広島県東部機械金属工業協同組合
7	公益財団法人ひろしま産業振興機構
8	福山商工会議所

◆行政機関・その他

	名称
1	広島県立総合技術研究所 東部工業技術センター デジタルものづくり支援担当
2	福山市 企画財政局 企画政策部 デジタル化推進課

（4） 事業の実施体制（イメージ）



（5） 各機関の役割・協力事項

○教育機関

・学生の状況や、プログラム等の情報提供
・新設プログラム案への助言
・学生への動機づけ、学習意欲継続への取組等の助言
・実証授業結果の分析
・プログラム開発、実証講座開催等

○企業・団体

・業界情報提供、プログラム案、実施方法への助言
・現場での先端 IT 導入や IT 活用事例紹介、必要と思われる能力等
・実証講座結果の分析

○行政機関・その他

・行政機関におけるIT活用状況や実施研修の状況、情報提供、助言
・実証講座結果の分析

（6） 事業の趣旨・目的

VUCA時代、社会環境が複雑性を増し将来の予測が困難な状況になってきている。IT技術の進展により産業構造や競争原理が変化しており、これに適応しIT活用による企業競争力強化や付加価値を高めることは、産業界において不可欠である。とりわけ先端IT人材は、2030年に約45万人が不足、需要が伸びなかった場合でも約16万人が不足すると試算されており（2019 年経済産業省）その人材育成は急務である。

また、地方におけるIT人材不足は顕著であり、需要ギャップを補うためにも専門学校におけるIT人材育成の役割は非常に重要となっている。そこで、本事業では、本校近隣地域に多い製造業を主として企業・団体と連携し、先端IT技術適用を思考し活用できる人材育成プログラムを開発する。IT人材育成にはまず間口を広げ、苦手意識を持たないよう学びやすさへの対応も必要であると考える。

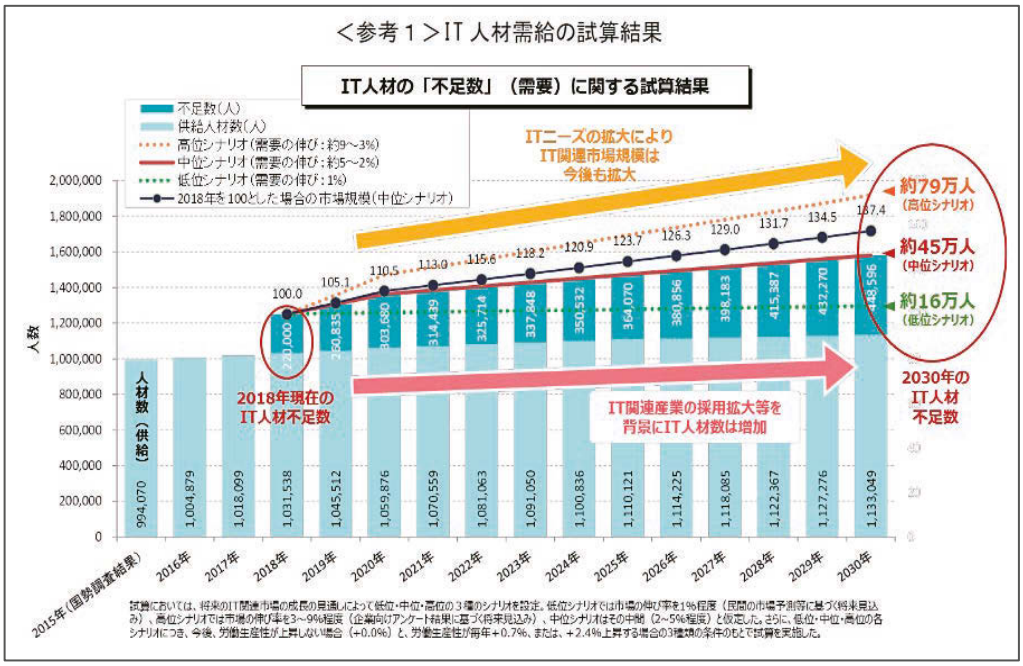
IT技術やそれを応用した便利なサービスを体験することで、先端IT技術を学ぶ必要性、動機付けを喚起する。検証を重ねた開発プログラムは、今後専門学校において、例えば商業分野から IT 分野への学科の転換・新設を図る際のモデルカリキュラムとして活用され、将来の先端IT人材育成に繋げるべく学科の理系転換等の再編を推進・支援することを目的とする。

注釈：「先端 IT 人材」とは、AI、ビックデータ、IoT といった先端 IT 技術を用い開発できる人材のことを指す。「IT 人材」とは、先端 IT 技術に限らない IT 技術者のことを指す。

（7） 当該モデルが必要な背景

■IT分野における専門学校の現状と課題

人口減少及び少子高齢化が進行する中、平成4年の約 204 万人をピークに 18 歳人口は減少の一途をたどり、令和4年には約 112 万人となっている。
それに比例して専門学校入学者数も平成4年の約 36 万人をピークに令和5年には約 24 万人と大きく減少している。このような状況の中、IT人材の不足が問題となっており、
2030 年には約 45 万人が不足すると試算されている。専門学校においてもIT人材を育成することに大きく期待されており、人材輩出は急務である。
しかし、需要に反して令和 5 年度の専門学校理系分野（工業分野・農業）入学者数は、全体の 16%程度にとどまり、さらに、工業分野の「情報処理」に区分を絞った場合は、全体の約 5%にしかならないという現状がある（文部科学省　令和 5 年度学校基本調査より）。それがさらに地方都市となると、都心と比較し人材不足はより深刻である。

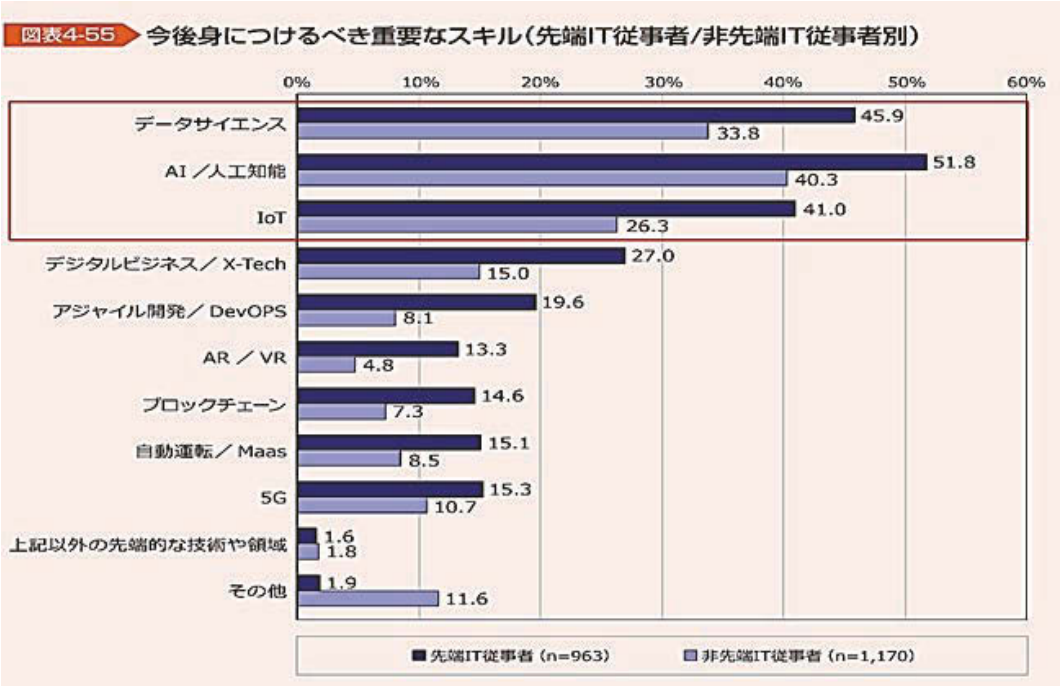


（平成 31 年経済産業省「IT 人材需給に関する調査（概要）」より）

■今後身につけるべきITスキル

IPA 独立行政法人情報処理推進機構による「デジタル時代のスキル変革等に関する調査（2021 年度）」では、IT分野において「今後身につけるべき重要なスキル」として、下図のような結果をまとめている。

先端IT従事者および非先端IT従事者ともに、「AI」「IoT」「データサイエンス」との回答が一番多くなっており、IT活用現場においても、先端IT技術のニーズが見られ、人材育成の必要性が高まっていると言える。



（IPA「デジタル時代のスキル変革等に関する調査（2021 年度）」より）

■先端IT人材育成学科新設プログラム開発の必要性

全国専修学校（計 124 校データ）でのIT系学科の募集状況は、次のとおりであった。
　〇令和6年度　1,933 名　　〇令和5年度　2,218 名　（前年比　87.1%）

上記の通り、全国的にIT系学科に進学する学生の割合が減少してきているのが現状である。
IT系学生の減少に歯止めをかけるため、当校においてもカリキュラム内容を毎年アップデートしているが、それでもITを学ぶ学生は減少傾向にある。
当校で教育提供している職業実践専門課程であるITビジネス学科においては、ITの基礎学力向上および卒業後に即戦力となる人材育成を目指してカリキュラム編成を行っている。その中でも、AI時代を意識し、カリキュラムの中にビックデータ、データサイエンス科目を導入しているが、ビックデータに関しては1年次で 60 時間、データサイエンスでは 2 年次に 30 時間を設定しているが、圧倒的に時間数が少ないため、AIに関する専門的な各種ツールを使いこなし、設計や実装にAIを用いるためのITスキルを身につけることが難しい状況にある。

今回の事業においては、上記の背景のもと、以下の課題を解決すべく取り組む。

①IT人材（特に先端IT人材）不足
②IT系学科募集減
③先端IT技術者育成プログラムの開発・整備による学科新設

上記、課題解決に向けての方向性として
・社会が求めている先端技術の技能習得により業界での活躍がイメージできる学科の新設を行うことでIT系学生の増加に努める。
・AIを用いるための実践的なITスキルの習得ができるカリキュラムの構成
・将来の先端T人材育成に繋げるべく、学科の新設・検証を行い、地方におけるIT人材不足の解消に寄与できるよう取組み、課題解決に資するものになることと考える。

（8） 開発するモデルの概要

■開発モデルカリキュラム概要と目標

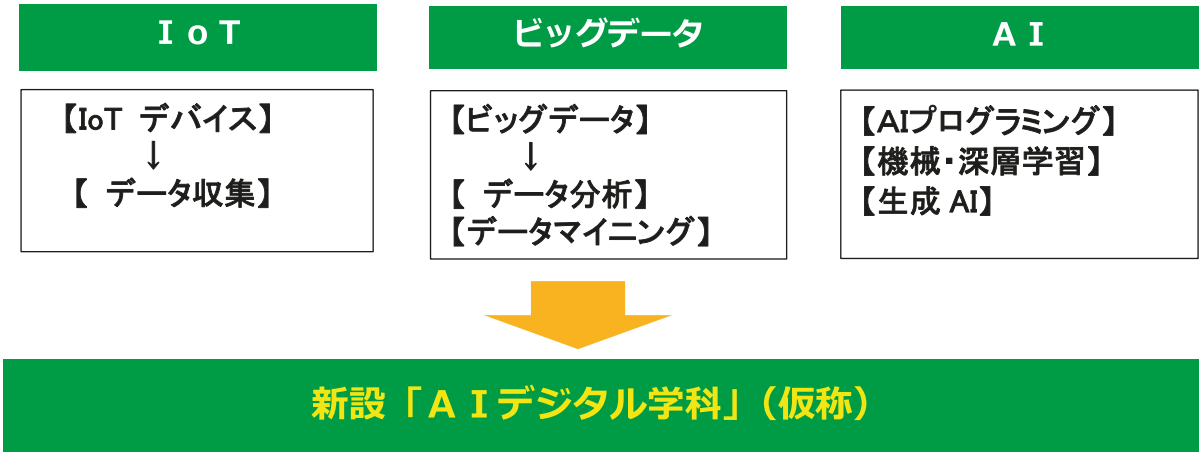
〇本事業で目指す先端IT人材育成のためのプログラム全体像

業務がデジタル化し、DX の推進、AI技術の活用・応用に向け、先端IT人材は必要不可欠となっている。本事業では、AI、ビッグデータ、IoTの先端IT技術を中心とした人材育成プログラムを開発することで、人口減少やIT学科の入学者減少の中でも活躍して行ける先端IT人材を育成・輩出し続けられる学校の姿を目指す。

〇モデルカリキュラム概要

便利なIT技術サービスの体験、基礎学力の学び直しを取り入れることで、先端IT技術を理解し、その技術を業務において活用できる人材を育成する。
カリキュラムの特徴は、3つの先端ITを凝縮して構成し、体系的に2年制で学べる設定になっているところである。また、その技術に必要な従来型IT技術のエッセンスも効率よく学ぶモデルにもなっている。AI等部分的に学べる民間の研修等は多数あるが、これからの時代を担う主に高卒者対象の学科として効果的であると考える。
（学科全体においては、IT科目以外にも必要な一般教養科目や就職支援を含む）

＜3つの先端IT主要カリキュラム＞



高校で数学の無かった学生、数学の苦手な学生向けに、データ分析に必要となる数学のキホンを取り入れ、脱落防止・モチベーション維持の対策もとっている。

■令和 R7 年度　IT 活用系カリキュラムについて

R6年度事業結果を踏まえて、下記内容について取り組む。

・生成AI及びクラウドサービス活用
・ノーコード・ローコードツール（Power Apps）によるアプリ作成
・RPAツール（Power Automate）を利用した定型処理自動化

＜学びの3つのポリシー＞

■アドミッションポリシー（入学者受け入れの方針）

・主体性を持って多様な人間と協働し、学び続ける意欲がある人
・目指す IT 業界の専門職業人として、発展に貢献する意欲の高い人
・世の中の暮らしの中で IT 技術を活用して便利にしたい人
・業界で評価される IT 技術を習得し即戦力として活躍したい人

■カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）

・IT 業界で必要な知識、技術を体系的に学べる授業構成とする
・IT 業界で活躍中のプロ講師による授業を実施する
・チーム内での役割や他人との関わりを学ぶため、グループワークや外部企業へのインターンシップの機会を設定する

■ディプロマポリシー（卒業認定の方針）

・地域、国際社会に貢献できるコンピュータ全般の知識を有し、システム開発技術を身につけている
・システム設計、プログラミング、AI に関わる専門知識・技能を習得し、社会で発揮できる
・常に新しいことに挑戦することで、課題解決に必要な柔軟な発想力を有し、自ら積極的に信頼関係を構築できるコミュニケーション能力を身につけている

カリキュラムモデル（案）

分類	科　　目
DX 推進	DX 概論
	経営マネジメント基礎
	マーケティング基礎
	ビジネス発想法
	品質管理
	データ分析・活用
	図解による業務フローと問題解決技法
	RFP(提案依頼書)作成技法
情報リテラシー	情報リテラシー（Word、Excel、PowerPoint　実習）
	コミュニケーションアプリケーション(Teams)　実習
	Web サイト制作実習
IT システム基礎	ハード・ソフトウェア・ネットワーク
	データベース基本設計
	データベース操作（SQL）
	情報セキュリテイ基礎
	クラウドコンピューティング
IT ツール活用	データベース実習（Access）
	RPA ツール（Power Automate）
	ノーコード・アプリ開発（Power Apps　）
	ノーコード業務アプリ活用（Kintone 実習）
ビジネススキル	コミュニケーション技法
	プレゼンテーション実習
AI概論	日常生活でのAI利用と社会、産業における活用の可能性
AI基礎	機械学習、ディープラーニング、生成 AI
生成 AI 活用実習	ビジネス活用（プラニング、企画立案、アイデア出し、報告書、プレゼン資料作成等にて有効活用できる手法を習得する）
AI・IT活用事例考察	小売・卸売、製造業等の事例
	行政機関、産業団体、地域産業でのAI、IT 活用推進
	AI、IT活用職場見学
アプリ作成演習	ノーコード・ローコードツール活用による業務改善アプリ作成演習。企業における業務改善または DX 推進を想定してのアプリ作成。企画提案書～プレゼンテーションも行なう。

※これは現時点でのモデル案であり、変更する場合がある。

2. 実施計画の全体像

＜令和6年度＞

1. 企業アンケート調査
1）調査対象
・備後エリアを中心とした IT、製造企業ほか 300 企業
2）調査内容
・現場の課題、求めるスキル
・成長分野技術の導入状況、緊要度 等

2. 専門学校アンケート調査
1）調査対象
・中四国を中心とした専門学校 100 校
2）調査内容
・理系学科の有無、転換・新設検討度、その際の懸念事項、課題
・理系教員の配置状況
・理系学科の企業連携実習状況 等

3. 委員会開催
1）事業目的、IT 分野の動向等情報共有
2）調査結果分析、課題・ニーズの整理
3）実証講座内容・ステップの検討
4）次年度スケジュール策定等

4. プレ実証講座カリキュラム案の作成

5. プレ実証講座の開催

6. 検証評価委員会
1）実証授業の見学
2）講座内容、指導法評価
3）受講状況の確認

7. 報告と成果物
1）事業報告書
2）Web サイトでの活動報告
3）プレ実証講座カリキュラム

＜令和7年度＞

1. 教育モデルカリキュラム開発
1）シラバス
2）補助レジュメ
3）評価アンケートシート（学生・教員）
4）確認用テスト
5）教員用指導書

2. 講座名確定と開発学科の人物像である AP・CP・DP の検討・仮設定

3. 実証講座の開催
1）学生向け実証講座開催（※）
・実証講座 ・確認テスト
・アンケート
※広くプログラムの効果を測るため、状況により既存教員・社会人含む
2）評価・分析
・評価アンケートシートの分析

4. 委員会開催
1）実証結果報告
2）検証・評価・課題整理
3）次年度カリキュラム概要案作成、意見、助言聴取
4）次年度スケジュール策定等

5. 検証評価委員会
1）実証授業の見学
2）講座内容、指導効果等評価
3）受講状況の確認

6. 報告と成果物
1）事業報告書
2）Web サイトでの活動報告
3）当年度の開発コンテンツ（シラバス、教材等）

＜令和8年度＞

1. 教育モデルカリキュラム開発
1）シラバス
2）補助レジュメ
3）評価アンケートシート（学生・教員）
4）確認用テスト
5）教員用指導書
6）企業連携 PBL 型事例での学習

2. 開発学科の人物像である AP・CP・DP の確定

3. 実証講座の開催

1）学生向け実証講座開催
・実証授業 ・確認テスト
・アンケート
2）評価・分析
・評価アンケートシートの分析
3）企業ヒアリングを基にした疑似 PBL 演習

4. 委員会開催
1）実証結果報告・検証・評価
2）開発モデルカリキュラムの最終検証
3）移行計画の策定
4）普及・定着に向けた取組み、方法の検討

5. 検証評価委員会
1）実証授業の見学
2）講座内容、指導法評価
3）受講状況の確認

6. 報告と成果物
1）事業報告書
2）Web サイトでの活動報告
3）すべての開発コンテンツ一式

第2章　令和7年度の活動

1. 令和7年度の活動

（1）令和7年度の全体スケジュール

	取組内容①	取組内容②	取組内容③
	プログラム検討委員会 検証評価委員会	実証講座準備・実施	事業報告と成果物PR
5月	～ 事 業 開 始 ～		
6月		第1回 委員会 開催日程検討 実証講座カリキュラム素案検討	
7月	7/30(水) 第1回プログラム検討委員会 開催 実証講座カリキュラム案説明 （意見聴取） 年間スケジュール確認	実証講座講座評価アンケート素案検討	
8月		実証講座シラバス検討・作成 講座使用テキスト等 検討・作成	
9月		受講アンケート、確認テスト 検討作成	
10月		【専門学生対象】 実証講座実施 10/22(水)～ 12/10(水) 全 8日、 39時間 【社会人対象】 実証講座実施 10/25(土)～ 11/29(土) 全 6日、 27時間	
11月			
12月	12/10(水) 実証講座 委員にて見学、その後 検証評価委員会 開催 実証講座実施報告、見学した 実証講座について （意見聴取、検証・評価）	受講アンケート、理解度テストの集計、分析 実証講座実施報告に関わる各種報告書類作成	事業成果報告書に関わる各種報告書類 及び 次年度事業計画書作成取りまとめ完成、提出 Webサイトにて各種報告書及び事業取組み活動等を公開し、普及を図る
1月			
2月	2/6(金) 第2回プログラム検討委員会 開催 実証講座実施報告 （意見聴取、検証・評価） 次年度事業・実証講座、予定 概要説明（意見聴取）		
3月	～ 令和7年度（2年目）事業終了 ～		

（2）令和7年度の取組内容

■取組内容①

・プログラム検討委員会／検証評価委員会

会議名 ①	プログラム検討委員会		
目的・ 役割	事業運営の計画・実行・評価。 改善についての意見や助言してもらい事業内容を充実させる。 事業内容、目的について確認及び情報共有し、関係者間での意識のすり合わせを行う。		
会議の 具体的 内容	**①第1回委員会：7／30（水）開催** • 事務局より今年度の実証講座案、委員会開催などの事業計画について説明を行なった。 • 実証講座内容の方向性について、1年目取組みの一つである地元中小企業を中心とするアンケート調査から、システム開発人材よりも、IT ツールを活用できる人材へのニーズが高いことが明らかになったことを説明した。 • これを踏まえて、 実証講座内容にて、ノーコード・ローコードツールを扱うこと及び、生成 AI 及びクラウドサービス利活用についても扱うことを確認した。 • 委員会では、受講予定の文系学生に、「興味をもたせること」、日常生活でどう役立つのかを実感できるようにする工夫が必要だと確認した。 **②第2回委員会：2／6（金）開催** **実証講座の報告（検証、評価、ご意見聴取）** • 実証講座見学結果とアンケート結果を共有した。 • 学生の学習状況（文系学生が主体的に取り組めた点）を報告した。 • 満足度・学習理解ともに 80%超で推移、KPI すべてで目標を上回った。 • 「身近なテーマ」を扱うことで、IT 活用が自分事化され学習効果が高まった。 • DX 推進には「業務理解・課題発見・改善意識」が不可欠であると再確認 • 企業連携案（PBL）の方向性を相談した。 **次年度の実証講座の予定** • デザイン思考（共感→定義→発想→試作→検証）を取り入れた内容にて、問題発見、解決に役立てる。 • 企業連携、事例を参考にしたPBL学習の検討。		
委員数	17 人	開催頻度	年2回

<table>
<tr><td>会議名②</td><td colspan="3">検証評価委員会</td></tr>
<tr><td>目的・役割</td><td colspan="3">開発したプログラムの実証講座の見学、受講アンケート分析、受講状況、受講の有用性等を評価・分析するために構成する。</td></tr>
<tr><td>検討の具体的内容</td><td colspan="3">◆検証評価委員会：12／10（水）開催

実証講座 「生成 AI・クラウドサービス活用」「Power Apps（アプリ作成）」「Power Automate（定型処理自動化）」について、アンケート・確認テストの結果確認・分析、委員評価等意見聴取。

• 公務員学科の学生は IT 初学者・文系中心であったが、演習内容を理解し主体的に取り組んでおり、基礎的な IT リテラシー向上に効果が認められた。
• 自由課題では、学生の興味関心（本の管理、音楽、データ収集等）と結びついた実践が見られ、IT 活用が自分事化される教育効果が確認された。
• 一方、生成 AI や IT ツールの活用は限定的であり、日常的な利活用に広げる余地が大きいとの指摘があった。

• 受講学生の感想として、「もし、もっと早い段階で本講座を受講していれば、自身の進路選択が変わっていたかもしれない」という意見が確認された。
この声は、本講座が学生に対して 職業選択の視野拡大や IT 分野への関心喚起に寄与していることを示す象徴的な評価であり、学習経験がキャリア形成に与える影響の大きさを表している。

• グループワークや意見交換、他者との議論等を取り入れ、より学習効果を高めための取組みも検討すべきである。</td></tr>
<tr><td>委員数</td><td>7人</td><td>開催頻度</td><td>年 1 回</td></tr>
</table>

■取組内容②

・実証講座準備・実施

実証講座日程表

＜専門学生対象 時間割＞

NO.	日付	曜日	受講人数	実証講座名	1日の授業時間	講座時間合計
1	10/22	（水）	18	生成AI/クラウドサービス活用	6	12
2	10/29	（水）	18	生成AI/クラウドサービス活用	6	
3	11/05	（水）	7	統合型クラウドサービス概要 Microsoft365、Teams、Copilot （Power Apps アプリ作成）	4.5	18
4	11/12	（水）	7	Power Apps アプリ作成	4.5	
5	11/19	（水）	7	Power Apps アプリ作成	4.5	
6	11/26	（水）	7	Power Apps アプリ作成	4.5	
7	12/03	（水）	7	Automate（定型処理自動化）	4.5	9
8	12/10	（水）	7	Automate（定型処理自動化）	4.5	

＜受講学科＞
公務員学科1年制・1年生　　11人、 受講内容： NO.1～2
公務員ビジネス学科2年制・2年生　7人、 受講内容： NO.1～8

＜社会人対象 時間割＞

NO.	日付	曜日	受講人数	実証講座名	1日の授業時間	講座時間合計
1	10/25	（土）	14	統合型クラウドサービス概要 Microsoft365、Teams、Copilot （Power Apps アプリ作成）	4.5	18
2	11/01	（土）	14	Power Apps アプリ作成	4.5	
3	11/08	（土）	15	Power Apps アプリ作成	4.5	
4	11/15	（土）	15	Power Apps アプリ作成	4.5	
5	11/22	（土）	15	Automate（定型処理自動化）	4.5	9
6	11/29	（土）	15	Automate（定型処理自動化）	4.5	

＜社会人＞
当校専門学校生問わず一般の方対象　15人

○開発に際して実施した実証講座の概要（1）

■「生成AI/クラウドサービス活用」

実証講座の対象者	専門学生 （公務員学科）
期　間 日数・コマ数	2日・全12時間（90分×8コマ）
実施手法及び実施内容	☐ **生成 AI の利用体験（ChatGPT、Gemini）** • アイデア出し、簡単な文章作成、「壁打ち相手」など • 検索 AI ツールの利用体験（Perplexity、Felo） • プロンプトの解説 ハルシネーションや事実確認についての注意。 ☐ **Google Workspace の基本機能・操作、共同作業実習** • ドキュメント、スプレッドシート、ドライブ、Meet、Chat 体験。 ☐ **生成 AI の活用** • 地域防災をテーマに講習会アイデア出し、企画案作成。 ☐ **Canva を使って制作物 作成** • 作成できる制作物の種類、共有方法、出力方法を学ぶ。 ☐ **Canva でブレインストーミング** • Canva のホワイトボード上に各自の意見を記載していく。 • 意見を Canva の AI を使ってカテゴリ分けして整理していく。 ☐ **Google マイマップで「避難所マップ」を作成** • グループオリジナルの避難所マップを作成。 • QR コードからアクセス可能にする。 • 地域防災講習会の資料に埋め込む。 ☐ **Google フォームを使ったオンライン申込み** • グループ内でのデータ共有。 ☐ **Google サイトで情報発信** • Google サイトを活用して、今回の成果物をチーム内で共有できるように整理する。
実証結果	• 「AIは難しいもの」から「自分にも使えるもの」へと認識転換した。 • 業務・学校行事・地域活動など、具体的な活用場面を自ら想像している様子が確認できた。 • 特に、非 IT 学生の学習意欲を高め、主体的な参加を促す上で極めて効果的であった。 • 段階的・継続的な学びへの発展可能性が高いことも示された。
受講者数	18人

○開発に際して実施した実証講座の概要（2）

■「Power Apps アプリ作成」

対象者	① 専門学生（公務員学科） ② 社会人 ※ 上記①、②クラス編成、日程をそれぞれ分けて実施
時間数 日数・コマ数	4日・全18時間（90分×12コマ）
実施手法及び実施内容	☐ **Microsoft 365 の基本操作** • Teams による情報共有、チャット、ファイル共有の活用 • OneDrive・SharePoint を用いた共同編集、クラウド保存の体験。 • Forms によるアンケート作成と結果集計。 （ 例： 旅行企画アンケート） ☐ **Power Apps 基礎** • 画面構成・操作方法の理解。 • 出席管理アプリなど、簡易な入力フォーム作成。 • SharePoint リストと連携したデータ登録・編集・一覧表示の体験。 ☐ **小規模アプリ作成実習（学生・社会人向け事例を含む）** • クラス名簿／顧客情報入力アプリ。 • 社内備品の貸出管理アプリ。 • 在庫管理・売上日報などのアプリ。 ☐ **機能追加・完成フェーズ** • 検索・並べ替え・など、必要機能の追加。 • アプリ作成手順の復習。（データ処理、SharePoint 連携など） • 個人テーマによる小規模アプリ作成と成果発表。
実証結果	• 初心者でもアプリが動く成功体験により、IT に対する苦手意識の軽減が見られた。 • 処理や数式が長くなる場面では、構造理解が追いつかず難しさを感じる傾向が見られた。 • アプリ作成自由課題にて、各自身近なテーマでアプリ作成した成功体験ができ IT ツール活用への意識付けに有効であった。 • Copilot を積極的に活用しながら理解を補完する姿勢があり、主体的な学習姿勢が育まれた。 • SharePoint 連携など、次の学びへの意欲が生まれている点は大きな成果。
受講者数	22人

○開発に際して実施した実証講座の概要（3）

■「Power　Automate（定型処理自動化）

対象者	① 専門学生（公務員学科） ② 社会人 ※ 上記①、②クラス編成、日程をそれぞれ分けて実施
時間数 日数・コマ数	2日・全9時間（90分×6コマ）
実施手法及び実施内容	□ **Power Automate 概要・基本理解** • 自動化処理に必要な基本知識を理解する。 □ **クラウドフローの基本操作** • 「Teams 通知フロー」を作成し、簡単な連携を体験する。 □ **Power Automate Desktop 基礎** • Desktop フローの画面構成と基本アクションを学ぶ。 • Excel に自動入力する簡単なフローを作成し、RPA の基本ステップを体験する。 □ **Desktop フロー応用**（Excel・ファイル処理） • ファイル操作・繰り返し処理・条件分岐など実務に必須のアクションを習得。 • フォルダ内ファイル一覧を取得し、Excel に自動出力するフローを構築。 ※「定型処理の自動化」を実践的に体験する。 □ **Web 自動化実習** • Web 画面の UI 要素取得、入力、データ取得などブラウザ操作の自動化を学ぶ。 • Web ページから取得した情報を Excel に保存するフローを作成し、Web＋Desktop 連携を理解する。 □**個別制作・成果発表** • 各自の興味ある内容、業務やテーマに沿った自動化フローを作成する。 • 講師のサポートを受けながら完成させ、最終的に成果を発表する。
実証結果	• 講座満足度（大満足 60%、満足 40%）が非常に高い。 • 「もっと勉強したい」100% と高い継続学習意欲。 • Excel・ファイル操作・Web 操作を自動化する基本スキルを習得。 • 日常内容（ニュース、天気、株価等）が理解促進に有効。 • Power Automate を「楽しい役に立つ」と評価する声が多数。 • 定型処理の「分解→自動化」手順を習得し、「業務自動化のイメージ」を持つことが出来た。
受講者数	22人

■取組内容②

〇開発したモデルの検証

■開発モデル

① 生成AI/クラウドサービス活用

② Power Apps アプリ作成

③ Power Automate（定型処理自動化）

■アンケートをもとにした検証

①受講者からの評価

・受講アンケート ・確認テスト結果

別紙アンケート結果資料参照

②検証評価委員からの評価

検証評価委員による上記開発モデルの実証講座及び、「Power Automate（定型処理自動化）」実証講座の見学を含めての検証評価委員会による評価。

■委員意見・見学評価（要約）

- Power Automate は、複数 IT 科目の中でも分かりやすく、学生の評価が高かった。
- IT 初学者・文系学生であっても、理解・吸収が早く主体的に取り組んでいた。
- 学生は生成 AI や IT ツールを限定的にしか使っておらず、活用余地が大きい。
- 自由課題において、学生の関心分野と結びついた取組が見られた。
- アプリ作成課題について、ある程度テーマ条件を絞った“業種別課題”のような形にすると学習がスムーズになる。前提条件のあるテーマのもと「どう問題解決するか」など具体的な課題を提示することで、より効果的な学びが可能になる。
- 講座効果を測るためには、受講前後の意識変化の可視化が望ましい。
- 実務や生活における具体的な改善効果が示されると、理解がより深まる。
- グループワークや意見交換を取り入れる余地がある。

課題（助言・提案）

- 講座効果を理解度、意識や行動の変化として把握するためのビフォー／アフター評価が不足している。
- 自動化による具体的な効果（時間短縮・負荷軽減等）の提示があれば納得性が高まる。
- 実際の業務を想定しての課題設定が必要である。
- 個人作業が中心であり、他者との議論等による学びを取り入れればもっと効果的であった。
- 講座時間をもう少し増やせば、理解の促進ができ、学生の興味が高まる。

総　評

- 本実証講座で実施した Power Automate による定型処理自動化は、IT 関連科目の中でも分かりやすく、学生から高い評価を得た。
- IT 初学者・文系学生であっても理解が早く、主体的に実習へ取り組む姿が確認された。
- 自由課題では、学生の関心分野と結びついた取組が見られ、IT 活用を自分ごととして捉える効果が認められた。
- 一方、生成 AI や IT ツールの活用は限定的であり、活用促進の余地がある。
- 講座効果を明確に示すため、受講前後の意識変化を把握する評価設計が求められる。
- 実務を想定した課題設定やグループワークの導入により、学習効果の向上が期待される。

実証講座見学についてのアンケートコメント（要約）

- 学生は、自分の興味・関心に基づいたテーマ設定で、主体的かつ熱心に取り組んでいた。
- 講座時間を追加すれば、さらに学習効果が高まる可能性がある。
- 講座内容自体に大きな問題はなく、構成は適切である。
- 受講前後のアンケートを実施することで、意識変化や学習効果がより明確になる。
- 「もっと早く受講していれば進路が変わっていたか」という問いは、本講座の意義を象徴するものと感じられた。
- PC や AI に対する意識が前向きになり、私生活での活用意欲も見られた。
- 手作業・コード記述・ツール活用の比較を行うことで、IT 活用の理解がより深まると考えられる。
- IT に触れてこなかった学生が、自ら関心分野に対してツールを適用し、プロセスを完遂した点がよかった。
- 学生の感想は率直で好意的であり、他校への展開可能性を感じた。
- 改善点として、より実際の仕事を想定した課題設定があると良い。
- 生成 AI や IT ツールを活用できる学生が、企業や自治体にとって即戦力となることが期待される。

■担当講師のコメント

専門学生対象講座　講師コメント要約

所　感

- 受講学生は講座全体を通じて高い関心を示し、説明を真剣に聞いていた。
- 学生が日常生活の話題や興味を積極的に共有してくれたため、教材・実習内容を柔軟に調整できた。
- Power Apps・Power Automate といった新しい技術にも臆することなく取り組み、吸収力の高さが際立った。

良かった点

- 学生同士が自然に教え合う協働的な学習環境が形成され、理解を促進した。
- 自由制作では、学生が自身の興味や生活場面を反映し、創造性と応用力を発揮した。
- エラー時もすぐに答えを聞かず、自分で原因を探り試行錯誤する主体的な学びの姿勢が見られた。
- 社会人受講者に比べ作業スピードが速く、実習においてトライ＆エラーを繰返し積極的な取組みが印象的だった。

改善点

- 学生からは「より高度な内容にも挑戦したい」という声が多く、講座時間内で扱い切れなかった点が課題。
- 実務で重要となるクラウドフロー（Power Automate）が講座内で十分に確保できなかったため、時間配分の見直しが必要。
- 学習効果を最大化するために、安定したネットワーク環境の整備が重要であると再認識。
- 十分な質問時間の確保などで質問しやすい雰囲気づくりについての改善余地がある。

社会人対象講座　講師コメント要約

所感

- 業務上の課題を明確に持ち、実務適用の視点で真剣に取り組んでいた。
- 業務効率化やツール活用のポイントを「自分の仕事にどう活かすか」という観点で捉えていた。
- IT スキル差・業務経験差が大きく、受講者全員を同じペースで進める難しさを感じた。

良かった点

- 講義中も積極的に質問が出て、双方向性のある質の高い学習ができた。
- 単なる操作でなく「なぜその処理をするのか」「どの業務に応用できるのか」という視点も意識することができた。

改善点

- 受講者のスキル差を吸収しきれなかったため、人数を絞る・レベル別クラス分けなど細やかな運営が必要。
- 実習中心だと操作が目的化しやすく、業務改善思考を伝える時間の確保が課題。
- 受講後に復習・検証を継続するための環境（社内支援体制・学習機会）の整備が必要。
- 講座単体で完結させず、組織的に継続学習できる仕組み作りが重要。

＜実証講座の様子＞



Google　Map による避難所マップ作成



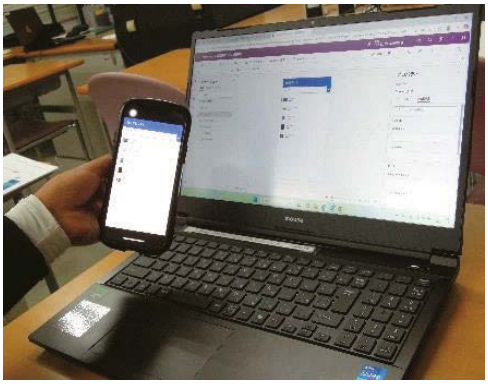
NotebookLM を活用したストーリーブック作成



Canva ホワイトボードにてアイデア出し、整理



Apps 初心者向けアプリ作成講義



アプリ公開・共有にてモバイル上でアプリ稼働　及びクラウド上でのデータ共有確認



自由テーマ設定にて各自アプリ作成

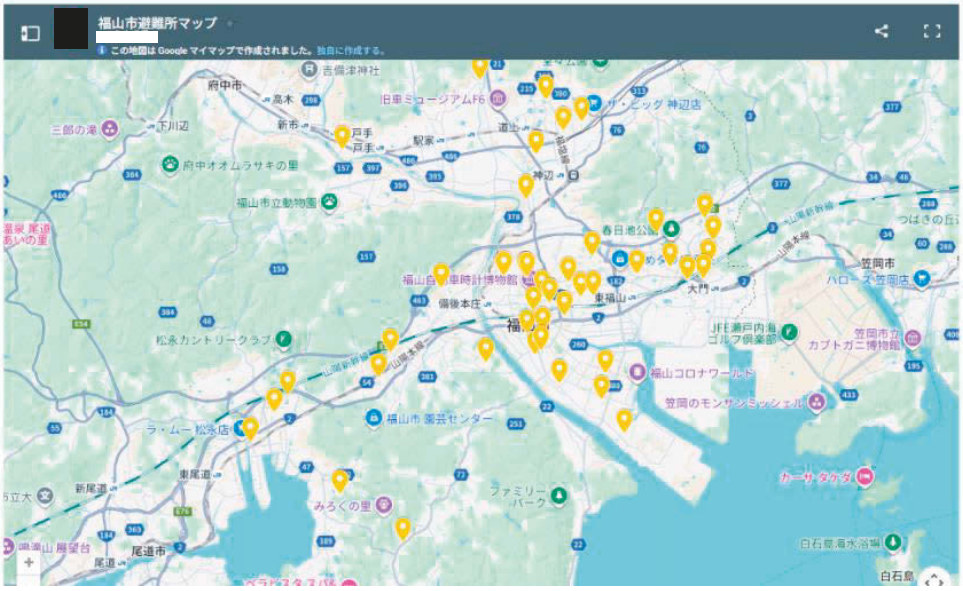
＜学生制作物例＞





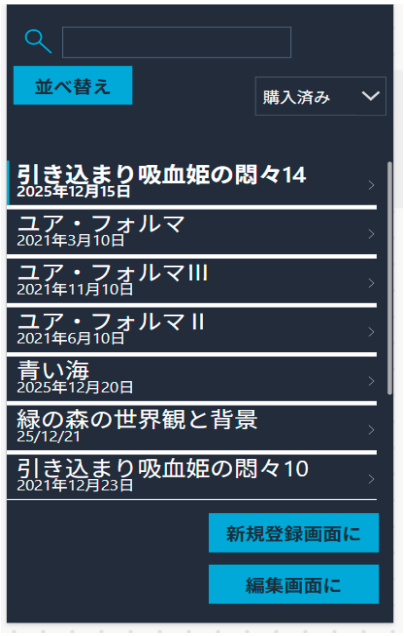
Canva を利用してのチラシ作成

避難所マップ



Google スプレッドシートにて、クラスメンバーで共同編集した一覧から避難所マップ作成

Power　Apps によるアプリ作成（学生作成例）





【本購入履歴アプリ】





【訪問旅行先、お店記録リスト】

（3）事業実施に伴うアウトプット（成果物）

【令和6年度】実績	【令和7年度】実績	【令和8年度】予定
①企業アンケート調査・報告書 （企業の求めるIT人材・スキル、最先端ITスキルの導入状況、必要度等） **②専門学校アンケート調査・報告書** （理系学科への転換・新設の検討度、その際の懸念事項、理系教員の配置状況、カリキュラム調査、企業連携実習状況等） **③プレ実証講座カリキュラム等一式** まずは興味をもってもらう位置づけ（入門編）としてのAI・プログラミング体験。 ・教材資料 ・シラバス、コマシラバス **④プレ実証講座報告書** **⑤事業成果報告書** 当年度の実施内容をすべてまとめ、専門学校等へ送付し事業普及へ活かす。 **⑥Web サイトでの活動報告** 事業内容、各種報告書等すべてWeb公開し、自由に閲覧できるようにする。	**①実証講座カリキュラム等** （業務効率化・自動化等、開発でなくユーザーの立場からIT・DX推進人材育成に向けた内容） **■シラバス** シラバス・コマシラバス **■講座教材** 補助レジュメ 確認用テスト　等 **■評価アンケートシート** 学生用／教員用 **■教員用指導書** **②実証講座報告書** **③AP・CP・DP 案** **④モデルカリキュラム** **⑤事業成果報告書** 当年度の実施内容をすべてまとめ、専門学校等へ送付し事業普及へ活かす。 **⑥Web サイトでの活動報告** 事業内容、各種報告書等すべてWeb公開し、自由に閲覧できるようにする。	**①実証講座カリキュラム等** （2年目の内容をふまえた応用編、専門学校生が現場で即戦力となれることを想定した内容） **■シラバス** シラバス・コマシラバス **■講座教材** 補助レジュメ 確認用テスト　等 **■評価アンケートシート** 学生用／教員用 **■教員用指導書** **②実証講座報告書** **③AP・CP・DP 策定** **④モデルカリキュラム** **⑤理系学科移行計画策定** **⑥事業成果報告書** 当年度の実施内容をすべてまとめ、専門学校等へ送付し事業普及へ活かす。 **⑦Web サイトでの活動報告** 事業内容、各種報告書等すべてWeb公開し、自由に閲覧できるようにする。

（4）事業実施によって達成する成果及び測定指標

KPI（成果測定指標）		単位	事業開始前	令和6年度	令和7年度	令和8年度
開発プログラムの内容を検証するために行う実証講座の受講人数	目標値	人数		20	20	20
	実績値	人数		14	22	
	達成度	%		70	110	

（上記 KPI の測定手法）複数科目の実証講座を予定。
令和6年度（1 月）、令和7年度（10 月～12 月頃）、令和8年度（10 月～12 月頃）
対象者はより多くの効果を測るため、学生を中心にその他社会人も想定する

KPI（成果測定指標）		単位	事業開始前	令和6年度	令和7年度	令和8年度
実証講座受講者の満足度・理解度	目標値	%		70	70	80
	実績値	%		90	80	
	達成度	%		130	114	

（上記 KPI の測定手法）
講座終了後に受講者へアンケートを実施し、満足度や理解度を測定する。
最終的には全項目で 80%以上を目指す

KPI（成果測定指標）		単位	事業開始前	令和6年度	令和7年度	令和8年度
実証講座受講者の知識習得度	目標値	%		70	70	80
	実績値	%		53	85	
	達成度	%		76	121	

（上記 KPI の測定手法）
講座終了後に確認テストを行い、最終的には 80 点以上の正答となるよう指導方法や教材の改善を図る。

KPI（成果測定指標）		単位	事業開始前	令和6年度	令和7年度	令和8年度
講師・教員等関係者による開発プログラムの評価	目標値	%		70	70	80
	実績値	%		79	77	
	達成度	%		113	110	

（上記 KPI の測定手法）
講座終了後に講師や教員、関係者へのアンケートを実施し、プログラムの教育効果について測定する。全項目で最終的には 80%以上を目指す

(5)事業終了後に実施予定の取組及び成果の活用方針・手法

令和9年度以降～

事業終了後は、地域内外へ開発プログラムを紹介し、普及に努める。
まずは、プログラムや成果物は Web 公開し、どの学校からでも転換・新設の際に参考いただけるようにする。また、要望があれば随時個別にてメール等での質問対応も行う。

■地域への普及

・プログラム検討委員会委員の協力を得て、企業・行政・団体から周知いただく。
・事業終了後も技術を習得した人材が地域の企業等でその技術を活かせように企業・行政・団体との産学連携、インターンシップ、求人ニーズ、入社後のキャリアパスについても情報共有、フィードバックできる体制を継続する。

■事業成果の周知・普及

・エリアは地方を中心に、実績報告書や開発教材の送付、Web ページ公開により、周知を図る。また、全専研での当事業活動報告や普及に向けた啓発活動に努める。
・事業終了後も開発プログラムに関する技術について、地域の企業等でその技術を活かせように企業・行政・団体との産学連携、インターンシップ、求人ニーズ、入社後のキャリアパスについても情報共有、フィードバックできる体制を継続する。

■プレスリリース等の活用

活動内容を Web サイトのほか、SNS やプレスリリースも活用し、事業紹介、導入マニュアル等の情報提供も行う

＜成果物の周知・普及のための体制＞

